

4 生活について

(1) 生活費（宿舎費を除く）：1週間 1ヶ月

項目	金額	内訳
食費	¥5000	夕食代(朝はホテル、昼は病院から無料で提供)
学用品購入費	¥0	
交通費	¥0	通学は徒歩
その他	¥0	
合計	¥5000	

※平日のみ

(2) 派遣先周辺地域の治安等

ホテル～病院周辺の治安は悪くなく、日中徒歩で通学しても問題ない。交通量が多く車の速度も速いのでその点は注意が必要。Wilmington のダウンタウンはやや治安が悪く、多くの店が閉まっている日曜に訪れるのは避けた方が良さそう。

(3) その他留意事項等

横浜よりは一段階寒く時々雨も降るため、防寒対策をしっかりとるべき。

5 実習について

実習診療科と主な内容（ 救急、一般外科、外来 ）	
実習内容	① 朝8時から Morning report に参加
	② 救急…レジデント、PA、指導医について救急外来見学、ER カンファ参加(金曜日、2時間程)
	③ 一般外科…オペ室でオペ見学、レジデントの業務見学
	④ 外来…レジデントについて外来見学

(1) プログラム初日の行動

8:00 病院ロビーで先生に挨拶し、院内を案内してもらった。

8:30 N95 フィッティングテスト、ドラッグスクリーニング(尿検査)を行った。

9:30 救急外来見学 主にプログラムを担当する Selbst 先生について患者の診察やレジデントのプレゼンを見学した。

12:00 昼のカンファレンス 鉛中毒についての講義を聞きながら昼食をとった。

13:00 救急外来見学 午前と同様に見学し、時々レジデントの診察も見せてもらった。

16:30 終了

(2) 実習詳細

救急:

Emergency Department ではレジデントが患者の問診診察を行って上級医にプレゼンし、その後上級医が患者の部屋に行き診察する。主にレジデント、時々上級医にもついて見学した。聴診や触診を一緒にさせてもらった。つく先生によっては問診もさせてくれた。毎週金曜の

ERカンファではレクチャーや腰椎穿刺の練習会などが行われ、救急科のレジデントと共に参加した。

一般外科:

基本的にオペ室にいてオペ見学を行った。最初の手術は7時半または8時に始まるため、この週のみMorning reportには参加しなかった。鼠径ヘルニアや胃瘻の造設・抜去等短時間で終わる内容が多かったが、時々横隔膜ヘルニアの開胸修復術等も見ることができた。空き時間に手術症例の振り返りや糸結び等指導していただいた。また一度学生と一緒に経鼻胃管や尿道カテーテルの練習会に参加させていただいた。

外来:

一般外来にてプライマリ・ケアの現場を見学した。健康な子どもの定期健診が多く、他に救急外来に来るほどではない軽い風邪症状や皮疹等の主訴で来院する子どももいた。このようなケースでは頼むと問診をさせてもらえた。

昼のカンファレンス:

毎日違う先生が違うテーマで講義するのを学生やレジデントと一緒に聞きながら昼食を食べる。1時間程度。初日にカフェテリアで使えるカードをもらえるので、それを使って昼食を買いカンファ中に食べられる。昼食がその場で出る日もある。講義は基本的に聞くだけだが、時々先生からの質問の投げかけに対し、学生やレジデントが間違いを気にせずどんどん答えている様子が印象的だった。内容は肺炎、ECMO、予防接種など様々で非常に勉強になった。

(3) 一日の主なスケジュール(平日)

時間	6:00	6:45	7:30	8:00		12:00	13:00		16:30	17:00	22:00
行動	起床	朝食	ホテル 出発	実習 開始	選択科 での見 学	カンフ アレン ス・昼 食	実習 再開	選択科 での見 学	実習 終了	買い 物、夕 食、洗 濯、ジ ム等	就寝

(4) 休日の過ごし方

ホテル近辺のスーパーやレストランに行く
ボルチモア、ニューヨーク、フィラデルフィア等の観光
ホテル内のジムで運動する

(5) 留意事項等

医学英語を勉強していけばするほど分かることが増えて面白くなるし、質問もしやすくなると思う。救急外来はシフト制であり日によってメンバーが変わるので、その都度日本から実習に来た生徒である旨を伝えて積極的について行く必要がある。

6 留学全般について

(1) 自身の成果・感想

本プログラムの魅力として、4週間の中でプライマリ・ケアから救急、手術まで非常に幅広い医療現場を見られる点が挙げられる。これによって軽い風邪から外科治療を要する疾患まで多彩な病態とそれぞれへの対応を学ぶことができた。また日本の大学病院における実習ではあまり見る機会のなかった定期健診も見学し、様々な年齢の子どもの発達について学ぶ非常に良い経験となった。

今回私は小児病院で実習を行う機会を得たことから、小児やその親に対する小児科医としてのコミュニケーションスキルの習得を目標の一つとして掲げていた。実際にこれに関しては多くの学びを得られたと感じた。アメリカに限った話ではないと思うが小児科医は温和で気さくな先生が多く、患児や親と和やかに会話しつつも手際よく診察を進める様子を見ることができた。一般外来では飛び込みのない完全予約制で患者一人当たりに対する診察時間を確保できることもあり、雑談を交えつつ検査結果や治療方法を丁寧に説明していた。親からぶつけられる様々な質問や懸念に時折文献を引用しながら答えていく様子も見られ、このような対応には日頃から研鑽を積む努力が欠かせないと感じた。小児に対する診察についても多くの具体的なテクニックを目の当たりにした。例えば服や靴下のキャラクターを見てその話をする事で緊張をほぐしたり、聴診を嫌がる子どもに「心臓はどこかな、ここかな？」と話しかけながら頭や足に聴診器を当てて笑わせたりといったものである。小児科医を志しているものの小児診察の難しさが不安材料の一つと感じていた私にとって、このような一見些細なことも非常に勉強になった。

2週間見学した救急外来では、毎日先生方の診療やレジデントから上級医へのプレゼン等を見ることで日本と似たような診療の流れがそのまま英語で行われている様子が分かり面白かった。これらが理解できてきた後に実際に自分で問診を行うことができたのは一つの成果であると感じた。また先生に頼んで問診診察を自分で行ったり質問を積極的にしたりするなど、主体的に動いた分だけ面白さや新たな発見が広がることも実感できた。アメリカの医学生は元々の文化的背景や病棟実習での評価が将来の志望科選択などに関わることなどから積極的に質問や意見を発信する姿勢が備わっている様子が見られたが、自らの成長のためにもこのような姿勢を見習うべきだと改めて感じた。

日本とアメリカの医療の違いは数多く見られたが、まず日本であまり見ることのない疾患や背景を持つ患者さんに出会った点が挙げられる。例えば鎌状赤血球症によって体のあちこちに疼痛を生じ、救急外来に駆け込む子どもが多いことは貴重な学びであった。思春期以降の子どもには親のいないところで性交渉歴等に加えて薬物使用歴についても確認しており、中には薬物の使用を当たり前のように打ち明ける子どももいて驚いた。そのような子に対してどのように医師として対応しているのか聞いたところ、ただ止めるよう説得するよりも本人の意向を聞いてカウンセリングにつなげたり、18歳以上などほとんど大人でリスクを承知で使用している場合などには敢えて深入りしなかったりすると回答であり興味深かった。一方でコロナ禍以降うつ病などの精神疾患を抱える子どもが増えているなど、国に関わらず共通して抱えている医療問題についても学んだ。

また、医師や看護師を含む医療スタッフが積極的にお互いファーストネームで呼び合っていた点も印象に残った。特に手術時のタイムアウトでは学生を含めた全員が簡単に自己紹介を行い、互いの名前を把握した上でコミュニケーションを取っていた。日本で多くは見かけない習慣だが、対等な関係作りやそれによって職種に関わらず意見を発信しやすくする環境作りにつ

ながることを教えていただきその重要性が理解できた。

全体として、今回の留学は新たな学びの連続で大変充実しており、自らの視野を大きく広げるものであった。このような貴重な機会をいただいたことに心から感謝し、今後の成長の糧としていきたい。

(2) 今後の展望

今回の留学では自分から問診診察など主体的に関わればその分発見や疑問が増え、積極的に質問していくことで学びが大きく広がることを実感した。そこで直近の目標として、今後の実習では疑問点を探しながら見学することを心掛け、可能な範囲で主体的に参加する意識を常に持ちたいと考えるようになった。

日本とはまた違う学びの広がりを実感した一方で、Observation というプログラムでの立場上できることが限られていたことや自身の英語力不足などからもどかしさを感じる場面もあり、更に勉強を重ねてもう一度海外の医療現場で学びたいという思いも改めて持つようになった。海外でも医師として活躍できるレベルまで自身の英語力や医学のスキルを高めていきたいと身が引き締まった。

(3) 後輩へのメッセージ

海外の医療現場を実際に見る経験から学べることは本当に多く、視野が大きく開けると思う。将来海外で働きたい人に限らず少しでも興味のある人は是非挑戦してみてほしい。Nemours 小児病院は複数の科を見学でき、希望次第で柔軟に調整してくれるので様々な現場を体験したい人におすすめする。

医学部医学科 海外派遣プログラム報告書

氏名 T. A. 学年（留学当時） 5年

実習期間 2023年 2月 27日（月）～ 2023年 3月 24日（金）

留学先機関名 Nemours Children's Hospital

1 プログラム内容について

(1) 参加した留学プログラム

- ・海外リサーチ・クラークシップ 海外クリニカル・クラークシップ
- ・その他短期派遣プログラム（ ）

2 現地までの移動について

		空港名	時間		空港名	時間
往路	日本発	HND	10:40	現地着	PHL	15:45
	経由地着	ORD(Chicago)	7:25	経由地発	ORD	13:00
復路	現地発	PHL	15:55	日本着	HND	4:45
	経由地着	LAX	6:42	経由地発	LAX	12:54
到着空港から実習（宿泊）地までの移動手段・時間・金額	移動手段（ Lyft ） 所要時間：（ 30 ）分 金額目安：（約 5000 ）円・（ 35 ）ドル・ユーロ・（ ）					

留意事項等

航空券は3か月前には取りましょう

3 宿泊先について

滞在期間	2023年 2月 25日～ 3月 25日	
宿泊タイプ	寮	人部屋 共有設備：（ ）
	ホテル・アパート	1人部屋
	ホームステイ	人家族 自分以外の留学生（ ）人
	Airbnb・シェアハウス	人で共同 ホストの同居；あり・なし 共有設備：（ ）
実習場所までの距離	（ 徒歩 ）で（ 20 ）分	
宿泊費用	9000円 / 1日・1週間・1ヶ月・（ 28 ）日間	
住所	1807 Concord Pike #202, Wilmington, DE 19803	

4 生活について

(1) 生活費（宿舎費を除く）：1週間（平日のみ）

項目	金額	内訳
食費	¥5000	平日の夕食(平日お昼は無料!)
学用品購入費	¥0	
交通費	¥0	病院まで徒歩(20分)
その他	¥0	
合計	¥5000	

¥5000（平日・食費のみ）

(2) 派遣先周辺地域の治安等

Wilmington のダウンタウンには危険なエリアがあるようだが、ホテルの周囲は安全だった。ホテルは大きな通りに面しており、道沿いにスーパーやレストランなどがある。暗くなってからもお店があるので人通り、明るさもあった。食事や生活用品の買い物はホテル周囲のお店で基本的に賄えるので便利。

病院までの道のりはアストラゼネカなどの企業の建物があり、仕事に来る人くらいしかおらず安全。ホテル関係者・病院関係者ともこの辺は安全とのこと。

(3) その他留意事項等

ホテルのHP等には記載ないが、ホテル内にコインランドリーあり。

5 実習について

実習診療科と主な内容（小児科の Observation）	
実習内容	① Inpatient Unit(1w)——9時から12時まで回診、午後は処置見学等
	② Outpatient Clinic(1w)——外来見学
	③ Emergency Department(2w)——救急外来見学
	④ Pediatric GI——内視鏡見学、回診等
	(①～④いずれの場合も毎朝・毎昼にレジデント向けのカンファレンス参加)

(1) プログラム初日の行動

8:00 受け入れの窓口になってくださっている Dr. Selbst とロビーで待ち合わせ

病院施設の案内後、各自の初週の実習先へ紹介

9:00 Inpatient Unit チームに合流し、回診

12:00 カンファレンス参加

13:00 入院患者の診察の見学など

16:30 解散

(2) 実習詳細

① Inpatient unit:

基本的に Emergency Department から入院してきた患者を担当する。Inpatient Unit の中でも

専門領域ごとにチームに分かれており、各チーム attending1 名と resident・fellow 数名で構成されている。私は Dr. Slovin (attending doctor) の Blue Team (general pediatrics) で実習させていただいた。具体的なスケジュールとしては、午前中は 8 時(または 8 時半)からのモーニングレポートの後、9 時から 12 時まで入院患者の回診を行った。レジデント一人当たり 4, 5 人の患者を担当し、チーム全体で 15~20 人くらいの患者がいた。私は、午前中は回診参加、担当患者のプレゼンを行った。午後は resident の患者の診察に同行したり、その時に話題になったトピックに関する短いクルズスをしていただいたりした。

② Outpatient Clinic :

患者は 1 歳児検診などの定期健診の患者や喘息、ウイルス性胃腸炎、皮膚炎などのコモンな疾患の患者が多かった。基本的には 9 時から 17 時(最後の患者が終わればもう少し早く)までである。実習の内容としては、レジデントの外来に同行させていただき外来見学をした。症例によっては問診、身体診察、アテンディングへのプレゼンまで行った。

③ Emergency Department :

ED は A(重症)~E(軽症)の 5 つの zone に分類されており、私は Dr. Selbst のいる B zone で主に実習させていただいた。基本的にはウォークインの患者を診るが、Outpatient よりも重症な患者が多い。ここでも同様に問診・診察をさせていただいた。スケジュールも基本的には 9 時~17 時で他と同程度であった。

④ Pediatric GI :

inpatient unit のチームの一つで消化器疾患を扱う。内視鏡検査の見学や回診などに参加した。基本的には GI チームのレジデントと行動を共にしていたが、何か処置などがあるときは別のチームのレジデントが声をかけてくれたため、呼吸器・腎臓・内分泌などの患者も診察することができた。スケジュールは①と同様。

(3) 一日の主なスケジュール(平日)

時間	6:30	7:00	7:30	8:00	9:00	12:00		16:30
行動	起床	朝食	出発	Morning report	回診他	conference	処置見学等	解散

(4) 休日の過ごし方

- 1 週目はワシントン DC 近くに住む友人を訪ねた。
- 2 週目は NY 観光。
- 3 週目は(土)は前述の友人と、(日)は窓口となってくださっている Dr. Selbst にフィラデルフィアを案内していただいた。

(5) 留意事項等

- ・医療英単語の勉強はやっておいた方がよい
- ・会話の練習もしておいた方がよい

6 留学全般について

(1) 自身の成果・感想

今回の留学は Observation であったので患者さんと直接かかわる機会はありませんでしたが、実際には Inpatient Unit では日本での実習のように回診の際に担当患者のプレゼン、Outpatient や ED では問診・診察・attending へのプレゼンもさせていただき主体的にチームに参加することができました。

Inpatient でのプレゼンでは、求められることや形式の違いはあれ、大まかな内容は日本と大きくは変わらないと感じた。新患の際は現病歴や既往歴などから今朝の様子まで細かく発表し、安定した入院患者では one-liner でプレゼンするよう求められていた。回診の中で感じた最大の違いは、一人の患者の回診にかかる時間と、保護者が回診に参加する点である。回診のプレゼンには基本的には保護者も参加し、長いときには 1 人の患者に対して 30 分以上かけることもあった。患者・家族への説明、患者自身の意思決定を非常に重視していることが感じられた。

問診はオープンクエスチョンから入り、徐々に的を絞ったクローズドクエスチョンにしていくという流れは、日本の OSCE で学んだことと同様だった。違いとしては、患者側が先に診察室にいて医師がその部屋に入ってくる形式や、マリファナや薬物の使用、自宅の銃の有無を聞いていた点が印象的だった。

また、4 週間を通して実習中は基本的にレジデントと行動を共にしていたため、米国のレジデントの働き方などもわかってよかった。

私が今回の実習で最も素晴らしいと感じた点は教育の質の高さである。毎朝・昼にはレジデントが主体となったカンファレンスあり、症例検討やテーマごとのレクチャーをレジデント同士で行う。その場には attending も参加しており、コメントやフィードバックも受けられるシステムになっている。Nemours 自体がレジデントも多く、教育病院としての役割も大きいことから、病院全体として教育的な雰囲気があり、学生の私にも非常に丁寧に指導して下さった。

レジデントだけでなく学生への教育のレベルも高いと感じた。フィラデルフィアにある Thomas Jefferson 大学からの学生も実習に多く受け入れており、彼らとも交流する中で日本との違いを感じる事ができた。彼らはチームの一員として患者さんの診察やカルテの記載が許されており、より主体的に学ぶことができているように感じた。学生に、より多くの権限を与えることは上級医の責任を増やすことになると考えられるが、医療の分業が進んでいる米国だからこそ、医師が業務のみに忙殺されるようなことはなく、高い教育のレベルを保っているのではないかと感じた。

(2) 今後の展望

現時点では、今後は日本で初期研修を行い、その後も日本国内で医師としての研鑽を積んでいきたいと考えている。今回の留学で、医師側からの視点としては米国の労働環境や待遇、教育環境などはやはり日本と比べて優れていると感じた。患者側の視点としては、患者ごとの十分なスペースの確保、医療者の丁寧な説明、予約・検査結果の通知・困ったことがあった際に相談できるチャットなどを含む病院のアプリなど、サービスが充実している印象を受けた。ハード面でもソフト面でも日本が米国に学ぶべきことは多くあると感じた。

ただ、その一方で日本の国民皆保険などの医療制度や、衛生環境・治安・食事など日々の生活を送る上での日本の良さを改めて知ることのできる良い機会にもなった。今回の留学は、将

来的に米国で臨床医になることを見据えて臨んだが、逆に、日本に生まれ、日本で医学教育を受けた身として日本の医学に貢献したいという気持ちが強くなった。

留学といってもその機会は臨床だけではない。現地で研究留学をしている日本人医師にお会いできたこともあり、研究留学という選択肢も魅力的に感じた。また、留学以外にも、国際学会の発表の機会など英語を使用する機会は少なくないと考えられ、英語学習に関しては今後も継続していきたい。

1 か月という短い期間ではあったがアメリカの医療の現場を実際に体験することができたことは非常に良い機会となった。違う考え方、システムを知り、別の視点を持つことができたことは今後につながる経験であったと考えている。

今回の留学で学んだことを今後の学生生活、医師人生に大いに活かしていきたい。

(3) 後輩へのメッセージ

小児科やジェネラルな医療に興味がある人に向いていると思う。実習する科は事前に希望を聞いていただけ（私は実習途中に変更していただいた）ので、自分の興味に合わせて選択できる点は魅力的だと思う。

Observation ではあるが患者さんを担当させていただいたり、診察や問診、プレゼンなどもさせていただいたりできるので、ただ見ているだけで終わってしまうということはない。そこまで重症な患者が多くないからこそ学生にもできることが大きいともいえるかもしれない。お願いをすれば大体のことはやらせてくれるので積極的に参加すれば得られるものは大きいと思う。また、小児科は比較的、米国国外からの医師の受け入れも多い科であり attending や resident の中にも国外からの人も少なくなかった。実際に英語が母国語でない医師がどのように働いているのかも見る点も米国で臨床医になることを考えている方には良い経験になると思う。